

所報

No.45

佐賀県教育センター

佐賀県佐賀郡大和町川上
TEL 0952-62-5211

もくじ

○ 人に学ばれる教師	1
○ 公開講座概要「こことからだの発達」—伊藤隆二先生—	2・3・4
○ 第21回全国理科教育センター協議会・佐賀大会報告	5
○ 研修講座実施状況と受講者の声・受講者への提言	6・7
○ 指導のチェックポイント—複式教育・中学校数学	8・9・10
○ 昭和62年度 長期研修生の紹介	11
○ 私のすすめる一冊の本・寄贈図書の紹介	12

人に学ばれる教師

佐賀県教育センター次長

本告公男



「教育は人にあり」「教師が変われば子どもも変わる」といわれるよう、今日、時代の要請にこたえ、学校の教育力を高めるには、教師一人ひとりが、その使命感に徹して、専門的な力量と実践的指導力を高めるための絶えざる研究と修養を積むことが強く望まれている。

去る九月、北京市の中日友好協会を表敬訪問した折、副秘書長の韓炳培氏は、今、中国では国近代化をめざし努力しており、その実現のためには人材養成が急務で、教育には全力投球をしていると話をされた。その後、その成果は「名師出高徒」いわゆる「師高くして弟子強し」と中国の古い諺を引用して、教師の資質向上に期待の大きくなつたことを強調されたことに強く感銘を覚えたものである。

当教育センターでも、現職教育の一翼を担い、本県教育の質的水準の向上を願って、本年度も108本の各種講座を開設している。これまでの開設状況をみると、先生方の理解と旺盛な研修意欲に支えられて、定員に対し129%の受講申込者がある。こうして毎年、本県教職員のおよそ3人に1人の割合にあたる教師が受講していくことになる。

なお、受講者に講座終了後の感想を聞くと、約90%の先生が「よかった」と回答している。先生方は、それぞれ目的をもって講座に参加されたと思うが、特に研究授業や実践発表、実技・演習等はすぐ現場の教育実践に生かされると好

評である。また、講座にはじめて参加された先生方も「受講して大変よかった」と受講後の充実感、指導への自信と意欲的なことばなど積極的な意見が多く寄せられている。したがって、当センターでは、常に学校現場に焦点をあて、これらの要望にこたえるよう、より良い講座を求めて改善・充実につとめている。一層の御活用をお願いしたい。

ところで、今ほど児童生徒や保護者の教師を見る目が厳しく、教師の資質、学ぶ姿勢が問われている時代はないと思う。「子どもは教師の後ろ姿をみて育つ」のことばのとおり、児童生徒は教師を尊敬し、信頼して常に教師の姿勢を見つめて成長している。

また、教師は児童生徒のみならず、保護者や教師同士の間にも知らず知らずのうちに多くのことを教えているのである。私自身、これまでにいろいろのことを素晴らしい先輩に学んできた。

私たち教師は人に学ばれる教師として、自分で自己を鍛えていく教師、自らの資質や指導力を高めつつ人を教えていく心豊かな教師でなければならない。そのための研修が望まれる。児童生徒はそのような教師の人間的感化によって変容するものだと思う。教師自らが積極的に磨き高める姿勢と指導者としての自覚をもち、日々人に学ばれる教師となる努力をしていきたいものである。

公開講座概要

昭和62年9月24日

こころとからだの発達

横浜市立大学教授

伊藤 隆二先生



上昇型発達観から回帰性発達観へ

子どもの成長発達を、今までできなかったことができるようになることであるというように前進的・上昇的変化としてとらえるならば、スピードや表現される能力の伸展が注目されるだけで、目に見えない「内面の世界」の質は見失われてしまいます。

私は障害児教育を学んでいるうちに、この自然界のありとあらゆるものは、その自然の摂理に従い、それによって生かされているのだということを教えられました。すなわち、人間の成長発達というものも、やはり自然の摂理に従い実現していくのだということです。

分かり易いように、蝶を例に挙げてお話をしましょう。

蝶は秋口になると、卵を産みつけて死んでいきます。この地球上には、約2万種類の蝶がいるそうですが、それぞれが皆その卵を産みつける場所は、卵からふ化してきた幼虫が、すぐ食べられる葉の上ということに決まっているのです。そして卵は越冬して、翌年の春になるとふ化する。卵からは5ミリぐらの糸のような幼虫がいっぱい出てきて、親が産みつけてくれた葉っぱを食べてどんどん太り、小指ぐらいの青虫になります。やがて、体の中から糸をはき出して自分の体をぐるりと取り巻いてサナギとなり、ジーンと身動きしない状態が続きます。そして時が来ると自然に殻が割れて、大きく変化した姿で出てくるのが蝶です。

蝶は、花から花へと飛び渡りながら蜜を吸い栄養をとって、やがては子孫を残すために、先ほど申しましたように、葉に卵を産みつけて自分は死んでいく……、土に戻っていく……、つまり、回帰していくのです。

ところで、人間の成長発達にもこれと似たところがあります。つまり、この卵、幼虫、青虫、さなぎという段階に相当する成長発達の上の「節」が人間にもあります。その最初にやって来る「節」は、3才前後だといわれています。

つまり、3才前の子どもと、3才を過ぎた子どもでは、質的に違うのだということです。そうすると当然のことですが、指導の仕方・方法も違うはずだということになります。そのことについては、後で詳しくお話をします。

その次に来る「節」は9才前後、その次は15才前後、そしてその後ずっといくつかの「節」を越えながら人間は成長発達し、やがて、土に戻っていくのだと私は考えます。

出生から3才頃までの約3年間は、「卵の時代」であり、3才頃から9才頃までは「幼虫の時代」、9才頃から15才頃までは「青虫の時代」、15才以後が「さなぎの時代」で、それからある年代を過ぎると、蝶として飛び立っていく。人間の成長発達は、このように想定されるのです。

母子共生期について

3才前の子どもは、母親と肉体的には離れておりますが、心と心の関係から申しますと、完全に一体化しております。つまり心理的な離乳がまだ十分にできていない状態で、これを私どもは、母子共生期と呼んでおります。

例えば2才の子どもが一人遊びをしているとき、お母さんがそのすきに勝手口からそっと出て買い物にいこうとしても、遊びに熱中している子どもには、それがすぐわかるのです。どうしてわかるのか不思議に思うくらいですが、私はおそらく本能的なものだと思います。つまり子どもは常に、すべての感覚受容器を広げて母親の動きを観察しているのだと思います。ですからお母さんが忍び足で出かけていくと必ず見つけて「お母ちゃん、どこにいくの。」と呼びかけてきます。

母親はしょうがないと思いながら、子どもをつれて買い物に出かけることになりますが、子どもはお母さんの後をまっすぐにはついていかない。土手があると登っていくとか、蝶が飛んでいると追いかけていくとか、水たまりを見つけるとしゃがみこんでしまうことがあります。お母さんは忙しいので、どんどん行ってしまい

ます。ところがお母さんが一定の距離以上離れますと、子どもに変化が起こります。たいていの場合にはワーケーと泣いたり「お母ちゃん、行っちゃだめ！」と言いながらあと追いをします。

次のようなおもしろい実験例もあります。お母さんが2才の子どもを連れて公園に行き、ベンチで編物を始めたとします。子どもは、最初のうちはお母さんにまとわりついていますが、そのうちだんだん行動半径が広がっていきます。しかし、決して5メートル以上の所には出でていかないといいます。

お母さんを中心に半径5メートルの範囲内で遊んでいるのです。ただし、それはお母さんの姿が見える範囲のことであって、すぐそばに隣などがあって、お母さんの姿が見えないような所ではダメなのです。ところが、5メートル以上離れた所にある砂場で子ども達がキャーキャー言いながら遊んでいると、そちらの方が面白くなつて、子どもは砂場の方へ行きます。子どもは別に5メートルという距離を測って知っているわけではありませんが、これも本能的にわかるのでしょうか。5メートルを越えた地点から急に不安そうな様子を示します。しかし砂場で遊んでいる子どもたちにひかれて、お母さんのほうを振り返りながら、勇気をふるってだんだん進んでいき、その砂場で遊び始めます。そのうちに、意地悪な子に砂をかけられたとか、あっちへ行けと言われたというようなことが起りますと、子どもは矢のように、まさに最短距離を通ってお母さんのところにもどってきます。そして、もしもそのときに、もとのところにお母さんの姿が見えないと、子どもは一時的ですが、半狂乱状態になり「お母さん！」と言いませんが、もうどうしていいのかわからない状態になつてしまうのです。その時、お母さんが姿を現しますと、抱きついて泣きじゃくる。こういう行動をよく見受けます。

つまり、3才前の子どもの場合、成長発達に絶対に必要な条件は何かと言いますと「心のよりどころがある」ということなのです。心のよりどころを失った子どもは成長発達が遅れるのです。家の中では何でも言う、歌も唄う元気な子なのに、例えば保育所に入ったとたん、歌も唄わなければ言葉もでない、何もしないで部屋の隅っこで、じつとうずくまっていることがあります。こういう子どもさんは心のよりどころを失った状態だと言えます。

ですから、保育所等で何もしなくなる子ども、つまり自分の力を發揮していない子どもは、心のよりどころを必要としているのだと判断し、母親がわりになってその子の心のよりどころになる人を必ず一人見つけてあげないといけないと私は思います。心のよりどころを絶対必要条件とするのが3才前の子どもです。

集団の中の子ども

では、3才を越えるとどういうことになるでしょうか。「お母ちゃんは行ってもいいよ」なんてことを言って砂場の方にいきます。これが3才を越えたか越えないかを見るひとつの指標尺度になります。言いかえますと、3才を越えると、子どもはお母さんとの共生生活から離れていくわけです。そして、社会的承認を求めて集団へ入っていく。これは3才というひとつの大きな「節」であり、子どもの独立への第一歩だと言ってもいいと思います。逆にいえば、母親からの精神的離乳は3才を待たないといけないんだということを意味します。

さて、3才になると集団の中に入つて行きますが、強い子にいじめられることもあり、できそうもないことを命令されることもある。「お前これをやってみろ」と言われて、とても自分にはできそうもないと思っても、ひとつやってみようかという気持ちがでてくる。集団だからでてくるのです。そして実際にやってみて、うまくできると、命令した子は「おい、お前なかなかやるじゃないか」といってほめてくれます。これを社会的承認といいます。他の子ども達も「うまくできたね」といってほめてくれる。お母さんにほめられたときよりも数十倍も嬉しいのです。そして、一人ではやれないことも、みんなで力を合わせるとやれるんだ、みんなでやる場合には自分勝手なことはできない、それぞれの役割を分担して力を合わせることによって集団の力が發揮できるんだ、そういうことも知っています。

集団の中で得られるものは何だろうかといふと、まず勇気です。やってみよう、できそうもないけれどやってみようという気持ち。それから集団の中での役割意識、これは責任感といつてもいいと思います。そして弱い子に対する思いやり、これは愛情です。人間愛といったらいいでしょうか。そういうものは集団の中だからこそ育つのです。お母さんとの一対一の関係では勇気も湧いてきませんし、意欲も湧きません。責任感を持つことも、思いやりの心を持つよ

うになることも集団だから育つわけです。

夢みる時代の子ども

3才を越えると、もうひとつの特徴があらわれます。子どもの心は非常にファンタジックになり、自分のイメージで生きていこうとします。おとぎ話が大好きになり、浦島太郎の話を聞くと本当に龍宮城があると信じて疑わない。想像性とか空想性の時代と言ったらしいでしよう。

3才をすぎた子はよく質問します。最初は「これなあに?」という質問から始まって、4才ぐらいになると「なぜ?」という質問がでてきます。雨が降ってくると「なぜ雨が降るの?」と聞きます。そう質問されて、さあこれは困った、水蒸気の話をしないといけないのかなと思うのは、これは間違います。「あの雲の上にね、鬼がいてね、ジョロで水をまいているんだよ」と言えばいいのです。もっとも、これが通用するのは9才頃までの子どもに対してです。9才すぎた子と4才の子とではメンタリティー(心性)の質が違います。だから9才頃までは、科学的なとか、実証的なとか、そんな答をする必要はないと思います。

「9才の壁」について

子どもが9才ぐらいになりますと、空想性が薄れます。この頃から現実的な世界に生きていくようになります。だから「雨はなぜふるの?」と聞かれたら、この場合には水蒸気の話をやらないといけないわけです。

なぜかというと、9才を越えると時間意識がでてくるからです。もちろん4才の子どももおぼろげながら時間はわかっています。例えば今「何時か」ということはわかりますし、昨日はこうだったとか、明日こうしようということはわかります。だが、時間意識がでてきたということはどういうことかと言いますと、ものとの順序性がわかつてきただということなのです。これをこうすればこうなるんだという因果関係を理解できるようになります。演繹的思考というのは、現在まだ起こっていないが、こういう条件があるならば将来必ずこういうふうになるだろうというひとつの仮説が立てられるということです。

勉強嫌いになる子は、9才の壁を越えられなかっただ子どもが多いといいます。

(文責 森崎 寛)

例え、お小遣いをもらったとき、パーッと使ってしまうのは9才前の子どもです。9才前の子どもは「今、この瞬間に」生きているのです。だからそれでいいのです。ためておいて、いくらたまつたらあれを買おうというふうに考

えるのは9才過ぎた子どもです。つまり計画性がでてきたわけです。まだ現実にはないが、こういうふうにしておけばこうなるということが見通せるようになったのです。だからためておくのです。お小遣いをパーッと使ってしまったといって叱る母親がいますが、9才前の子どもでは当たり前のことです。

こういうふうに9才を越えると、時間意識が

でてきて、順序性とか、因果関係がわかり、演繹的な思考ができるようになりますから、子どもは急に理屈っぽくなります。口答えをして親を困らせるのは9才を過ぎた証拠です。理屈っぽくなるというのは論理性がでてきたからであり、ものごとの結果ではなく、プロセスに興味をもってきたということを意味します。

そこで、例えば小学校4年生ぐらいの子どもに「ニュートンは地球には引力があることを見つけた。これが万有引力の法則である。わかったね。覚えておきなさい」と教えて、あとで試験をやる。子どもは暗記したことを書く。こういう勉強ばかりやっていると、子どもはだんだん学習意欲を失っていくことになります。では子どもの学習意欲を盛り上げていくにはどうしたらよいか。私は歴史を教えることが大切だと思います。つまり「ニュートンは、君たちと同じ子ども時代には、こういう遊びをしていた。こんなことに夢中になっていた。あるとき、リンゴが木から落ちるのを見て、疑問に思った。リンゴはなぜ落ちたのだろうか。それを実証するために、こういうことをやってみた。だけうまくいかなかった。またやってみた。まだだめだった。そうやっているうちにやっと、地球にはものを引く力があるということがわかったのだ。これを万有引力の法則といんだよ。」というぐあいに歴史を教えていくのです。きっと、子どもの学習意欲が旺盛になることだけあります。つまり、ものごとや現象の背後にあるものを順序だてて話してやることが大事なのです。

勉強嫌いになる子は、9才の壁を越えられなかっただ子どもが多いといいます。

(文責 森崎 寛)

昭和62年度

第21回全国理科教育センター 研究協議会並びに研究発表会・初等理科部会 佐賀大会報告

全国理科教育センター研究協議会と佐賀県教育センターの共催による「昭和62年度全国理科教育センター研究協議会並びに研究発表会・初等理科部会(第21回)」が、11月5日、6日の2日間、葉がくれ荘で開催された。

大会には、国立教育研究所次長の小島繁男先生や同地学教育研究室長の下野洋先生、広島大学教育学部教授の武村重和先生をはじめ、全国の教育センターと研究所から58名の会員の先生方、県教育委員会から山本敏明教育次長が参加された。

開会式では、佐賀県教育センター原正水所長(初等理科部会長)の主催者の挨拶や佐賀県教育長の祝辞があった。

続いて、「初等理科の本質をとらえ、研究・研修の充実を図るために、どうしたらよいか。」のテーマのもとに、全国の指導主事や研究員の先生方14名による研究発表や実践報告(口頭発表7名、紙上発表7名)が行われた。

2~3例をあげると、「意欲的に活動する力を育てる授業づくり」(熊本)や「生きた理科学習指導の計画と展開」(宮崎)、「科学に親しむ児童生徒を育成する学校教育」(鹿児島)などについて発表された。そして、学習中の情意的な側面に着目し、《学習意欲》、《素材等への関心》が、理科学習の中で、どのように保持され、変容していくかなどが明らかにされた。討議の中で「児童生徒が生き生きと活動する学習の要素」は何かということが論議的となつた。

午後からの研究協議では、「生活科(仮称)への対応について」と「野外観察講座実施上の問題点について」の二つの議題のもとに、熱心に論議が交された。

現時点における生活科への対応状況は、各センター様々であったが、今後生活科講座の新設については、新教科設定の背景を明確にするとともに、指導目標及び内容が示されてから具体化していく必要があるということが強調された。また、初等理科部会としては、低学年の理科を



(開会式における原所長の主催者挨拶)

生活科に、どう移行させていくか、講座のなかでどう取り組んでいくのか(移行をどう展開するか)が、来年度にむけての大きな課題になった。

講演では、広島大学教育学部教授の武村重和先生(前文部省教科調査官)が、「初等理科教育の動向と課題」と題して話された。その中で昭和65年度から「生活科」が新設されるに当たり、小学校低学年の子どもに対して、自然認識をどのように図り深めていくべきか。また、初等理科教育について尚一層の充実を図るために全国の教育センターと研修所の研究員や指導主事の先生方は、それにどう対応すべきかなど、熱弁をもって語られた。

夕食を兼ねた情報交換会では、佐賀の郷土料理を囲みながら、それぞれの教育センターの自慢や苦労など、胸襟を開いてかたりあわれた。

二日目の研修視察は、佐賀の歴史や風土についての所員の案内を聞きながら、《やきものの里・有田》を訪ねた。伝統工芸を継承していく酒井田柿右衛門氏の苦勞話や作品のすばらしさ、製造工程などに、参加者一同魅了された。

来年度、山形大会での再会を誓いながら、それぞれの帰路につかれた参加者の顔には、二日間の研修を終えた充実感と、佐賀の風土や文化に対する新たな認識を得た満足感が漂っていたように思う。(理科教育係長 森戸 吉昭)

研修講座

講座実施状況と受講者の声

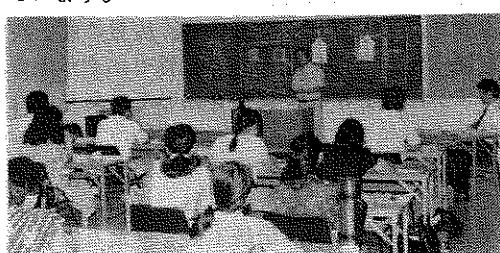
本年度、実施予定108の講座も、11月末日までに97の講座が完了しました。研修講座は、講義・研究発表・演習・研究授業・実験・野外研修など、多様な方法で行われました。定員2428名に対し、申し込み者3122名、受講者2691名、(受講者数は、未実施講座の受験決定者を含む)でした。受講希望は、県立学校教頭・小学校中堅教員・特殊教育専門・中学校中堅教員・教育相談基礎・小学校理科(野外観察)・心理検査(特殊教育)・小学校図画工作などの講座に、定員を大幅に上回るものがありました。受講をされた多くの先生方の中から、4名の先生方に受講者として、感想を述べていただきました。また、講師としてお招きした佐賀大学の松尾正幸先生に、「受講者への提言」をお寄せいただきました。ご紹介いたします。

「小学校社会科(低学年)講座を受講して

鳥栖市立旭小学校教諭 寺崎 武利
今回、初めて低学年の講座を受講しました。このところ高学年ばかり担任している私にとって、実に新鮮で有意義な講座でした。

溝内先生や松尾先生から生活科への展望を含めた低学年社会科指導のあり方を学びました。村岡先生からは、社会科学習の活性化という視点で教材との出会いの大切さ、体験活動の具体的方法について学びました。そして、小川先生の人間化をめざした実践発表と、田中先生の自作のパンを使っての研究授業、とくに、授業時の子供たちの目の輝きは忘れられません。あの輝きこそが活性化につながるものだと思いました。日頃、つい教材研究をおろそかにしてしまう自分。教材研究と授業のための準備がいかに大切なものであるかを痛感させられました。

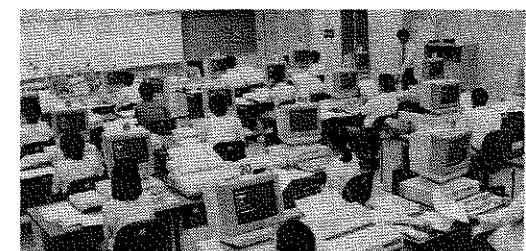
最後に、宿泊をし、多くの先生方と夜の研修で語り合い、お知り合いになれたことに感謝しています。



「小学校パソコン初級講座」を受講して

肥前町立田野小学校教諭 濱井千鶴子
9月に、センターからの講座案内を見たときすぐこの講座に申し込みをしました。それは、パソコン展示場で、成績処理されるのをみたり、又実際に授業に使っている人の話を聞いて、め

ずらしものがりの私も使ってみたいと思ったからです。しかし、申し込んだものの私にもわかるだろうかと不安で、日が近づくにつれてちょっと憂うつにも思いました。でも、それは思い過ごしでした。センターの先生方の懇切ていねいな指導は、全くはじめての人にもわかりやすいものでした。北九州の河野先生の実践発表を聞いて、これから学校教育は変わっていくのだなと思いました。まだ、すぐ現場で使えないのが残念ですが、そう遠くはないのじゃないかと思います。早く、どこの学校にでもパソコンが入ったらしいなあと思います。それまでに、どんどん利用できるように、しっかり勉強しておきたいと思います。



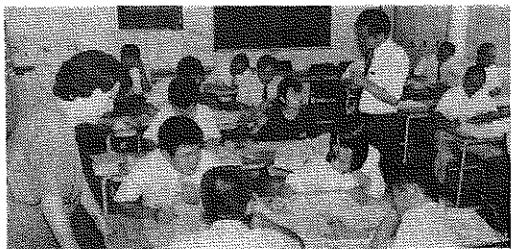
「指導と評価(中学校)」を受講して

佐賀市立城西中学校教諭 小出 明美
昨年、この講座を受講した後「よかったです、でも難しくてわからない所も多かった。」と一緒に受講した先輩教師に感想をもらした。するとその先生は「一回聞いてわからんもんね。二度三度と受けんば。」と一言。そうか、何度も受けなければいいのだと、今年二度目の受講。なるほど今回はずいぶんわかりやすい。ほんの少しの実践から質問もできた。そしてまた、新しい発見もできた。

昨年柏木先生がおっしゃった。「内容を何でも教えようとする教師が多くいる。目標を見極めて。」今年陣川先生はこう言われた。「目標

分析をし目標をたててもそれだけでは授業は変わらない。目標を達成させようとするところに工夫が生まれ授業が変わる。」胸に響いた。

目標分析、形成評価、S-P表などこの講座で学んだことを日々の授業に生かし、一瞬一瞬を大切にする授業をつくりていきたい。



「世界史講座」を受講して

佐賀県立唐津工業高校 教諭 藤井 伸幸
「人生における一大事は邂逅である」とは亀井勝一郎の言葉であるが、千載一遇・一期一会など『出会い』の意味する所は奥深い。人生前向きに取り組むか否かは本人次第であるが、そうした

~~受講者への提言~~

アイデアには執着し、よければそれを実践せよ

佐賀大学教育学部助教授 松尾 正幸(社会科教育)

私たち大学教官が、佐賀県教育センターの講師として、現場の先生方を前にして講義する意義はどこにあるのであろうか? 毎年、研修講座の講師をひきうけ、講義案を作製する頃になると、きまって私の頭の中に発生する疑問である。

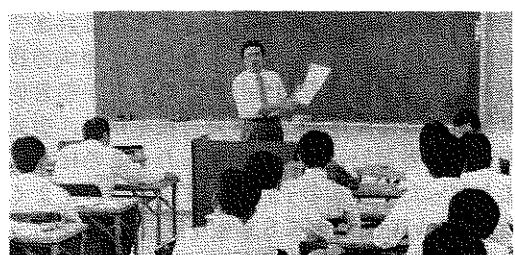
又、次のような問い合わせも最近の私の頭の中に発生している。「もし、大学教官である私が現場の先生方に与えれるものがあるとすれば、それはいったい、何であろうか?」

両者の問い合わせに対する自分の納得のいく解答をまだみい出し得ていないのが正直なところであるが、最近、後者の問い合わせに対して、解答の一部が見えてきたような気もしている。…………

それは、我々は、「アイデア」だけでもいいから、とにかく、提言してみることだと思う。良いアイデアであれば、現場に根づくアイデアであれば、あるいは、現場の教育実践の奥に必要とされているアイデアであれば、現場教師は本能的にそのアイデアを教育実践にうつすのはなかろうか。『アイデアだけででもいいから』

姿勢をもてば俗務に忙殺されようとも学問する機会は意外に多い。教育センターでの講座、駆け出しの私にとっては刺激の多いものである。過去二回の講座で久し振りに社会科学とは何か、歴史とは何かを考えた。

世界史離れ、離しが言われて久しい。受験戦争もさる事ながら、背景にある易きにつく風潮には合点がゆかない。世界史に関する知識量は一見多いようだが、それは他教科と然して変わりはない。眼前の障壁に近道を探すより、愚公山を移す方式で生きる生徒がいてもよい。いやそういう生徒の為に世界史はあると言つてよい。教育センターにしても同じこと、避けて通るより積極的に活用する立場で見たい。



という言葉は、一見、無責任に聞こえるが、以上のような、教育実践の専門家としての現場教師への深い信頼感を背景にいっていることを承知してほしい。

たとえば、中学校社会科教育の地理的分野を例にとって、そのアイデアを提言してみよう。「地理的分野における世界地理の学習は、資源と産業の学習ばかりになっていないだろうか。もっと、異文化理解の観点から、世界地理の授業は改善できないだろうか?」

このアイデアは、国際化社会をむかえた日本の社会科教育にとって、最も重要な授業改造の視点のように思われる。もちろん、どのような教材で、どのように具体的に授業を構成することが、異文化理解のための世界地理の授業なのか、現場教師にとって、このところが一番知りたいのであろうが。私は今のところ、「そのアイデアを選択し、執着し、実践するのは、専門家のあなたです」としか言えないような現状であるが…………。

指導のチェックポイント

複式教育

複式学級における学習指導

1 S先生の授業

S先生は単式校経験15年のベテラン教師である。どの教科についてもかなりの自信を持っていたし、それは皆の認めるところでもあった。そのS先生が複式校に転任してきた。これまでより多少は忙しくなるかも知れないが複式の授業だって何とかなるだろうと、いささかの自信を持ってS先生はやってきた。たしかに、複式の子だからといって特に変わったところはないようだった。単式の子に劣らずクルクルとよく動くかわいい目をしてS先生を歓迎してくれた。教科書もこれまでと同じ单式用だし、実験器具も運動用具も児童一人に一セットというふうに整っていた。ただの一つの違い——一つの学級に二個学年が同居している、それも少人数——を除けば変わったことはなかった。

しかし、授業はうまくいかなかった。S先生がこれまでの二倍ぐらい教材研究に時間をかけて、稻妻のように両学年の間を渡り歩いても二冊の教科書、二つの学年をかかえながら単式学級のように子どもを教育することはとうていできなかつた。そして、たった一か月で自信を無くしてしまつた。苦悩の日々が始まった。自信を無くし、ゆとりを無くした先生の授業で子どもたちが生き生きと伸びれるはずがない。暗い複式授業はそれ以後一年近くも続いた。教科の本質論にはかなり強いといふことが、かえつて複式という怪物の前ではいかに無力であるかということを思い知らされた。このような複式指導上の困難性はS先生に限つたことではなく複式学級を初めて担任する者の共通の悩みであると言えよう。

2 複式学級と学習指導

複式学級とは、同一学年の児童・生徒によって編成されている単式学級に対して、学年の異なる児童・生徒によって編成されている学級のことである。我が国の小学校においては、学校教育法施行規則第19条にあるように「1学級は

同学年の児童で編成すること」を原則としているが、「ただし、特別の事情がある場合においては、数学年の児童を1学級に編成することができる。」となっている。

また、学習指導要領の第1章総則5に、「学校において特に必要がある場合には、二つ以上の学年の児童で編成する学級について、各教科の目標の達成に支障のない範囲で、各教科についての学年別の順序に依らないことができる。」とある。このように、複式学級では複数の学年で学級が編成され、教科の学習では学年の順序に依らなくてもよいことが認められている。

3 複式指導の課題

へき地、小規模校の子どもたちは、その社会的環境からいろいろな特色をもっている。その中には、言語コミュニケーションの不足からくる表現力の乏しさ、少人数のため集団内での個人の位置が固定化し、刺激も少なく、何事もなれあいになって競争心に乏しく、学習意欲に欠けやすいなど、子どもたちの学習を阻害している要因とみられるものがある。こうした生活環境に加えて、指導に当たっても一人の教師が2学年の指導をするために、必然的に直接児童に対する学習（直接指導）と教師が離れている間の学習（間接指導）の形態にならざるを得ない。時間的には単式指導の二分の一しか教師の目が子どもたちに届かない。それだけに、直接指導を効率的にしなければならないし、間接指導における学習活動を充実させなければならない。

4 複式指導のあり方

複式指導では、上下2つの学年の学年別のにらいに従つて、同時に2つの学年の児童を指導しなければならない。そのため、指導法を工夫したり、学習意欲を高める配慮をしたり、学習内容の組み合わせを考慮することが大切となる。指導上配慮することを述べてみたい。

(1) 指導法の工夫

複式指導では、特に指導技術を重視し、効

率的に行われるようしなければならない。そのためには、教材研究を徹底し、どんな内容を、どう指導すべきかをしっかりと把えて臨むことが大切である。複式では、教材研究を二学年分すると同時に、直接指導と間接指導との絡み具合を考え、間接指導の有効な生かし方の研究に多くの労力をさかなくてはならない。また、少人数であることを生かして教師が個別指導する時間を多くとる。特に、能力に偏りがある場合には、個別指導により能力に合った指導を行う。また、少人数であるために話し合いが質的に深まらず、考えを練り合わせる指導がやりにくいので、教師はいろいろな観点から思考するように働きかけたり、ヒントを適宜与えるようにしたい。

(2) 学習意欲を高める配慮

間接指導時に意欲的に学習を進めていくためには、いろんな配慮がいる。その主なものとして学習グループづくり、資料、教育機器の活用などがあげられる。資料としては学習の手引き、学習ノート、ワークシートがある。間接指導時の学習を充実したものにするために、学習のねらいと時間を十分考えて準備していただきたい。また、教育機器を積極的に活用したい。器機としては、OHP、スライド、

テレビ、ビデオ、テープレコーダー、磁気録音機（シンクロファックス）、パソコン等がある。それぞれの機器の特性を踏まえて利用していくことにしたい。間接指導時の磁気録音機（シンクロファックス）、パソコン使用は少人数学習にとって特に有効なものと思われる。

(3) 学習内容の組み合わせ

複式指導では2つの学年の内容を、直接指導の効率化、間接指導の充実を図りながら、それぞれ学年別に指導する方法があるが、学習内容を組み合わせて、上下両学年をなるべく同じ単元や教材で指導した方が能率的であるとする同単元指導の方法がある。これをさらに大別すると、上下両学年の指導内容に幅を持たせて学年としては一部異なる内容で指導する1本案によるものと、上下両学年とも全く共通の学習目標で指導する2本案による指導との2つに大別できる。これは、複式学級は2つの学級社会であるという見方よりは、1つの学級社会であるという見方に立つて、なるべく共通の学習経験を与えながら、1つの学習集団として学習指導を行っていくことになる。実践に当たっては、十分研究して取り入れていく必要があろう。所員 小林 利之

中学校数学 個の学習を位置づけた単元指導計画 —3年「円周角」について—

1 個別化の必要性

近年児童生徒一人ひとりの能力や意欲の個人差に応じた教育を行うことが取り上げられていく。このことは、教育における目標が個人の能力を最大限に伸ばすことにあり、從来から行われている一斉画一的教育ではこの目標の達成は困難と考えられるからである。そこで一人ひとりを伸ばすためには学習課題に形成的評価を位置づけ、学習到達度に応じて一斉学習の長所を生かしながら、個別指導やグループ学習を効果的に組み合わせた学習システム化が必要だと思う。

2 個別化を取り入れた授業設計の手順

- (1) 効果的学習をはかるための学習システムを設計する。
- (2) 単元の目標分析と到達目標を設定する。
- (3) 学習システムによる単元指導計画を作成

する。

- (4) 学習シート（形成的テスト）を作成する。
- (5) 指導案の作成をする。

3 授業展開の実際

(1) 学習のシステム

一人ひとりが伸ばされるためには、一斉学習のみでなく、他の学習形態を含めた学習システムを考える必要がある。

そのためには、ある学習のまとまりの中でこれら一斉学習やグループ学習、個別学習をどのように位置づけたらよいか。また、この形態による学習時間をどの程度取り入れ、さらに、形成的評価をどう位置づけていけばより効果的な学習がなされるかを從来までの学習パターンを考慮してシステムを設計する必要がある。そこで、その学習システムの基本型を

私のすすめる | 一冊の本 |

「銀の匙」 (岩波文庫)

著者 中 勘助

子供の世界を描写して未曾有のものであること、その描写がきれいで細かいこと、文章に非常な彫琢があるにもかかわらず不思議なほど真実を傷つけていないこと、文章の響きがよいこと、などを指摘して、夏目漱石が賞賛した作品である。そこには子供たち特有なおそれや不安、悲しみや喜びなど微妙な感情が子供自身の目でとらえた世界として鮮かに描き出されている。大人が子供時代の感情を思い出し、子供たちと不安や悲しみ、喜びを共有できる作品である。

佐賀市立鍋島小学校 校長 畑瀬 一夫

甦る教育2 「ことばに力を」 (第一法規)

著者 森久保 安美

甦る教育シリーズ、4つの中の一冊である。この本の趣旨は、「学校の先生方の元気が出るような本を作りたい。ついては……」ということで企画され述べられている。

文中には、教え子の手紙、子どもを左右する教師のことば、あいさつひとつでも、方言のことなど、多くの具体例が入れ替わり立ち替わり登場し、「ことばは心の使い」という教師のことばを訴える著者の願いをこめた好著である。

伊万里市立山代中学校

校長 原口 辰巳

「子どもの宇宙」 (岩波新書)

著者 河合 隼雄

筆者は京大教授で臨床心理学を専攻する心理療法の専門家で、子どもの心理療法はあくまで子どもの宇宙への畏敬の念を基礎として行われなければならないという立場に立つ。本書は「子どものもつ世界の広さと深さ」を内外の著名な児童文学から探求するという手法をとり、自ら原作の紹介も兼ている。しかも文章には説得力がある。ことに「子どもと秘密」と「子どもと時空」の章には哲学的ともいえる感銘を受けた。

浜玉町立浜玉中学校

校長 吉森 励太

「四季のうた」 (長崎出版文化協会)

著者 竹下 哲

「人間は、自分の花を咲かせるために生まれてきた。咲いた一輪の花に、肅然とえりを正す心をはぐくむことこそ教育」と語る著者。

物質万能の戦後教育への反省から、「いのちの教育」「心の教育」を実践した。諫早高校長の時、グラウンドで校長の話が始まると、隣接する市役所の窓が一斉に開けられ、生徒の後ろには市民の姿も見えたという。どの真からも著者のこの教育実践の姿が髣髴される。

鳥栖商業高等学校

校長 江頭 繁雄

寄贈図書紹介

ありがとうございました。

本年も、個人、各種団体、各学校から貴重な図書・資料をご恵贈いただきましたので紹介いたします。これらは当教育センターに永く保存し、広く教育関係者の利用に役立たせたいと存じます。(敬称略)

- 佐賀県統計年鑑 (佐賀県総務部)
- 佐賀県干拓物語 (佐賀県農林部)
- 鹿島の人物誌 (鹿島市)
- 葉隠研究 (葉隠研究会)
- 次郎の里 (下村湖人生家保存会)
- 日本の父親と子供 (総務庁)
- 教科教育学研究 (4・5巻) (第一法規)
- 山本龍之助日記 (財団法人日本青年館)
- よみがえるアメリカの中学校 (安彦忠彦)
- バッハ先生と1000人の子どもたち (森玲子)

この他に、個人や県内小・中・高・養護学校から、研究紀要・論文・研究発表大会資料・指導案など、また、教育庁各機関などから広報紙などをご寄贈いただきました。

厚くお礼申しあげます。

(図書資料係)